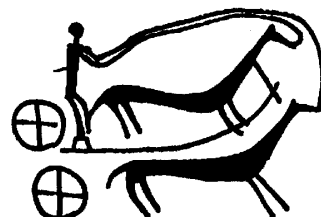


# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 33



全学教育科目規定の一部を改訂 ..... 5	生涯学習フォーラム「ユニバーシティ・ビジネスパートナーシップ」開催される ..... 14
北海道大学教育ワークショップ「インタラクティブな授業の開発」参加者による評価（速報） 高機能センター 小笠原正明 ..... 6	生涯学習計画セミナーを開催します ..... 15
忍路丸海のシルクロードを航く - 私のFD体験談 - 獣医学研究科 藤田正一 ... 12	北海道大学AO入試終わる ..... 16
FDのきき状況 文学研究科 瀬名波栄潤 ... 13	講演会：九州大学 21世紀プログラムとは何か .. 17
FDに参加して 愛媛大学副学長 西頭徳三 ... 13	高等教育ジャーナル原稿募集 ..... 17
音楽があなたを変える - 音楽の心を聴く - ジェンキンス教授によるデモ授業の案内 ..... 14	センター日誌・行事予定・編集後記 ..... 18

## 巻頭言 FOREWORD

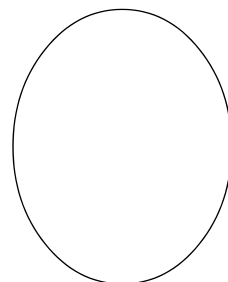
### 研究大学でコアカリキュラムは必要か？

マサチューセッツ大学アマースト校芸術学部 ジョン・A・ジェンキンス

#### 1. はじめに

上の問いかけに対して、私は力を込めて「イエス」と答えたい。私は30年以上にわたってマサチューセッツ大学アマースト校で、学部教育（訳者注：undergraduate educationのこと）のカリキュラム作成のお手伝いをしてきました。土地贈与研究大学（注1）の教員の一人として、また管理者の一人として、21世紀の民主社会でリーダーシップを発揮するための最良の準備教育として、一般教育と専門職業教育

との間の十分な学問的連携を提案しそれを擁護する必要に迫られることがよくありました。12月11日に高等教育機能開発総合センターで開催された講演会で、私は教員を組織したり、事務部や学生たちに組織的改革に取り組んでもらう方法について、北大の方々と楽しく議論いたしました。また



仲間の教員が、教育目標と教育方法を考え直し、それによって自分自身が活性化され励まされるようなファカルティ・デベロップメントについても議論しました。

この10月30日に赴任して以来、私は北海道大学の高等教育機能開発総合センターの客員教授であることを享受してきました。私をはじめこのセンターの皆さんにお会いしたのは、1997年に開かれた高等教育に関する国際ワークショップ「これからの高等教育と教育評価」に参加した時のことです。日本とアメリカ合衆国の主要な研究大学の芸術関係の教育の現実について、芸術分野で高名な広島大学長の原田康夫氏と協力して議論できたことは大変光栄なことでした。このワークショップの市民公開セッション「市民文化センターとしての大学」において良く考えた発言をされた札幌市民の皆様に対して、この際お礼を申し上げたいと思いますが、そこで私はこう申し上げたものです。

マサチューセッツ大学の芸術教育の現実、それが大部分の学生のアカデミックな生活の一部になっているということです。芸術は、一般教育をうける学部学生にとって立派なパートナーであり、21世紀のグローバルな生活に役立つものです。芸術はまた市民の文化センターとしての役割の重要な要素となります。

私と北海道大学との関わりは、1996年1月に小笠原正明教授が来学され、一緒に一般教育カリキュラムについて議論を交わした時に始まります。一般教育評議会の議長として、私は学生寮の中の教室で行われた「生きた芸術」(Lively Arts) 私どもの大学の芸術分野における最初の学際的な一般教育に小笠原教授をお招きしました。その後、丹保総長がUMass (訳者注：マサチューセッツ大学のこと、ユーマスと発音する) のキャンパスを再訪され、デビッド・K・スコット総長と私どもの大学の一般教育タスクフォースのメンバーを前に、次のように挨拶されました。

次世代の一般教育のテーマは、自然と人間の共生であります。地球環境の時代の教育は学際的でなければなら

ず、「一般教育」という総合的な分野から出発するものでなければなりません。高等教育におけるこの100年間の専門分化の後に、われわれは単に改良を求めるのではなく 革命をこそ、なし遂げなければなりません。

全国的に見ても私と同じような考えを持つ人がいるかと思いますが、極めて良く訓練された専門的職業人 それぞれの主要な分野で訓練されたスペシャリスト で、しかも批判的な考え方ができ、分野の境界を越えて問題を探求し解決できる人材に対する需要が今後ますます増えると予想されます。卒業後このような専門的職業人となる人は、学部レベルでは倫理的、法的、経済学的、政治学的、文化的な内容の学習をしなければなりません。この人たちは、複眼的な視野を持つよう教育される必要がありますが、そのような教育は、それぞれの専門家がより集ってデザインし教育するコア・カリキュラムによって、もっとも効果的になされるはずですが、私は、北海道大学やマサチューセッツ大学のような機関の研究者集団こそ、教育を通じて学部学生に積極的に関わる資格 そうしむけることができるとしてですが、際だってあると確信するようになりました。

## 2. 包括的組織改革戦略を組織する

1996年にデビッド・K・スコット総長は、大学の一般教育カリキュラムを複数年かけて再構築するための立案者および指導者として私を指名しました。問題は、主要な土地贈与研究大学であるUMassのユニークな力を利用して、いかに学部教育を再開発するかということでした。つまり、研究に熟達し、国際的な共同研究を指向し、多様化した入学者の資質とカリキュラムに深くかわり合った教員集団をどのように生かすかということでした。難しい問題は、思慮深い多くの学部学生と大学院学生とともに、いかに大学の中でもっとも尊敬されている教員や高位の管理者を巻き込むような改革戦略を組織するかということでした。スコット総長は、一般教育の改革を手伝ってもらうために55人の大学内のタスクフォースを指名し、さらに多くの人たちを、経験を共有する目的で11の専門分科会に委員として付け加えまし

た。このアカデミックな共同体から選ばれた合わせて126人の人たちは、3年半のあいだ月1回会議を持ちました。私は、札幌に来る前に、スコット総長にその最終報告書「一般教育：変革のプログラム」(General Education: A Program for Change)を提出してきました。

最終報告書を作り上げる手続きそのものがこの報告書の正統性の重要な根拠となり、現在のカリキュラムに対する批判としても、それに替わるものとしても、キャンパスにふさわしいものとなりました。タスクフォースが用いた方法は、権威主義的なものではなく有機的なものでした。あらゆる機会を捕らえて、わがメンバーは、自分たちの作業をキャンパスのすべての側面と結びつけました。メンバーは、それぞれの段階で、委員会やワーキング・グループが見出したことを反映させるよう、議論の方向を定めました。学生の証言や評価委員長の指揮による評価作業が、そのための根拠として使われました。仕事が進むにつれて、さまざまな分野の教員たちは自分たちの伝統的な領域を抜け出して、新しい創造的な関係を作り出すようになりました。作業を開始してから2年半以内に、タスクフォースのメンバーは、必須の科目を決める前に学生指向型の一般教育とはどのようなものであるかに焦点を当てることを圧倒的多数で決めました。この過程を通じて、わがメンバーたちは、科目一覧というよりは、主として学生の成果(outcomes)で定義されるような、「一般教育カリキュラム」の見通しを得ることができました。

### 3. 新しいカリキュラムの到達点を定義する

タスクフォースのメンバーは審議の初めに、学生については学習環境を、教員については教育環境を改善することに焦点を絞るよう採決によって決めました。作業の初期において、タスクフォースは以下のことを研究の枠組みとすることを組織決定いたしました。

- 1) 一般教育の目標は学生に生涯学習者となるための能力を付与することである。
- 2) 学生指向型の教育および学習は、すべての一般

教育の授業の規範となるべきである。教授たちが、次のような教育の形を作り出せるようにしなければならない。

- ・グループ討論，頻繁な授業内での作文，小グループによる問題解決，ダイナミックで創造的な活動，学生が学んだことを現実の生活に適応する機会を与えるなどの積極的な学習戦略
- ・批判的な思考の機会
- ・自分の力で調査，研究，思考し，将来の専門に適合したやりかたで問題を解決する経験
- ・他の授業や主専攻の勉強で得た知識を利用して学んだものを学生たち自身でものごとを組み立てることを助ける課題や活動

3) 学生にとっては初年次の経験がもっとも重要である。初年次のプログラムのデザインと実行は、本学でもっとも業績のある教員が関わるに値する。

4) 本学の学生たちには、グローバルに相互に結びついた世界で生きるための準備をさせなければならない。一般教育は多様性の問題にもっとも力点を置かなければならない。「多様性」の必要性を拡大して、インターナショナリズムと地球規模の多様性を包含させなければならない。

5) 科目配分は、事実に基づいた知識について十分な幅を持ち、自然科学，社会および行動科学および芸術と人文学について均衡を有するものでなければならない。

1年間の作業の後、1997年5月2日に大学の一般教育タスクフォースは、満場一致で次のような「到達目標の宣言，成果と基本姿勢」を決定しました。すなわち、「学び方を学んだ」と言われるような人たちの特徴は、次のようなものであるというものです。

生涯学習の基本を身につけていること。いろいろなやり方で学習することができること。いろいろなやり方で調査ができ、専門が錯綜する中で筋道をつけた研究ができるだけの十分な知識の幅を持っていること。このような能力だけでは、しかし、十分ではない。知識をどう使うかは最終的には個人が決める。それにもかかわらず、このような能力を生涯の学習において駆使する知恵と意志を持つことは、マサチューセッツ大学の卒業生の理想である。

#### 4. 学生指向型の授業：初年度の学生

マサチューセッツ大学は、毎年約4千人の1年目学生を受け入れています。一般教育の授業は、それぞれの学生にとって、「高校文化」と「家庭で管理された生活」から「大学文化」と「自律による生活」へと切り替わる重要な過渡的過程となっています。研究大学の1年次における授業は、学生たちを積極的な探求者、質問者、思考者になるための教育をするという責務を負っています。毎年4千人もの1年目学生に対して学生指向型の授業を行うために、大学は有する「資源」から、ある程度均衡を崩して、相当の部分を1年次のプログラムに対して配当しなければなりません。タスクフォースは、すべての1年次の授業は、以下のような基準を満たすべきであると勧告しています。

1) 積極的な学習を行える程度の小さいクラス規模。おおよその最大受講者数は分野により異なるべきであり、また大学の各スクールまたはカレッジの教員数によって決められるべきである。

2) 受講生全体を各25名以下の討論用セクションに分割した授業形式。それぞれのセクションにつく大学院のTAは、教育センターのTA研修を修了していないなければならない。

3) 積極的な学習と小グループ学習に必要な技術的な能力を備えた教室でおこなう授業形式

さらに、1年次の授業は、上の3の2)に示したような特徴を持つべきであると私たちは勧告しました。

#### 5. 学生指向型の授業：上級一般教育

タスクフォースは、一般教育の課程を終えた学生が挑戦してみたいくなるような一般教育の上級クラスの授業を開講すべきだと教員団に対して勧告しています。このような授業は、私たちが有するもっとも優れた研究中心の教員や、他の専攻の上級学生を起用して実現すべきだと思います。専門課程の上級のクラスでも3年生用の論文指導や学生が一般教育や専門教育で身につけた知識を総合してまとめること

ができるキャップストーン・コース（訳者注：卒業研究に相当するもの）を含むことになると思います。

#### 6. ファカルティー・デベロップメント

マサチューセッツ大学は、教育センターの活動により学生指向のファカルティー・デベロップメントのリーダーと目されるようになりました。その仕事の礎石の一つは、「リリー記念教育研究生研修」です。さまざまな分野のテニュア（訳者注：終身教授資格）を持たない教員が、大学教員となるための自分自身の研究活動を推し進めながら1年間教育の専門技術を磨ける制度です。最近、私たちは「一般教育のためのヒューレット記念上級研究員制度」を作りましたが、これはテニュアを得た教員が、調査、研究、問題解決型学習に教育の中心を置くことができるようにするための学習制度です。また、私たちの研修プログラムは、教員やTAのための多様な学習研修を含んでいます。例えば、「テクノロジー」上級教員研究員制度は、テニュアを持った教員が大規模講義で学習効果をたかめ、学生-教員の相互作用を高めるためにハイ・テクノロジーを利用できるようにするためのものです。また「サービス学習研究員制度」は教員がそれぞれの教育経験を持ち寄ってそれを組み合わせることができるようにするためのものです。

#### 7. アカデミック学習共同体

アメリカには、「アカデミック学習共同体」を利用して学生指向型の一般教育の授業を確立しようという国民的な運動があります。タスクフォースの第1年次授業実施のための分科会は、学習共同体を形成することは、学寮において勉強する雰囲気を作り1年目の学生に知的共同体の感覚を植え付けるもっとも有効な方法であると結論しました。私たちは、学寮の学習共同体 今のところ1年目の学生の34%が利用できるが を増やし、希望する学生のすべてを収容することを提案しています。幸いなことに、私たちのキャンパスは全国でも6番目に大きな学寮施設を持ち、学習共同体づくりに数十年の経験があることから、この目標を達成する良い位置にあ

ると考えています。

注1) 土地贈与大学 (Land-grant University) とは、1862年のモリル法により、アメリカ合衆国により設立・維持資金源として土地を贈与されてできた州立大学を起源とする大

学を指す。研究大学とは、競争的研究資金が財源の多くの部分を占める大学のことを指す。マサチューセッツ大学は、研究1大学に分類される。

(本文は英語。日本語訳は小笠原正明による。)

## 全学教育 GENERAL EDUCATION

### 全学教育科目規定の一部を改訂

#### - コア・カリキュラムに関わる実行課程表 -

10月27日(金)に第35回(平成12年度第5回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

議題1. 全学教育科目規程の一部を改正する規程について

報告事項1. 一般教育演習の履修調整結果について

議題1では、審議に先立ち、委員長より規程改正にいたる経過について、以下のような説明がありました。「2月2日の教務委員会において、学生の教育効果を期するため、コアカリキュラムを視野にいたれた全学教育科目見直しにかかわる基本的な考え方が了承されていること。これを受けて、6月2日開催の全学教育委員会で、現行の授業科目の見直しにともなう新授業科目が了承されていること。このあと、各学部から新授業科目に基づく実行教育課程表を提出していただいたので、これをも参考にして全学教育科目規程の一部を改正する規程案を全学教育委員会小委員会において検討し、今回の提案にいたったこと。」

つづいて土田共通教育掛長より規程案の説明があり、審議に入りました。規程案の記述について、安藤委員より外国語演習のランクづけの記載をはずしてほしいという申し出があり、担当部局の野澤委員の意見を参考にし、事務的に問題がなければ申し出

どおりにすることで了承されました。

規程案はセンター運営委員会の議を経て、教務委員会、部局長会議および評議会に諮られることとなります。最後に委員長より、この規程の改正にともなって、各学部規程の全学教育科目に関わる部分の改正が必要になるので、準備をすすめていただきたいという依頼がありました。

報告事項では、委員長より、第2学期においても第1学期と同じく一般教育演習の履修調整を行ったが、事前に周知されていたこともあり、スムーズに行うことができたという説明があり、つづいて山口小委員会委員長より資料に基づいた報告がありました。それによりますと、第2学期の一般教育演習には652名の学生が履修を希望し、第1学期の抽選において不許可となったものを優先したこと、初日の不許可者は95名であり、追加での許可者は、12日52名、13日29名であること。今回は自分で調整すると申し出てきた教官はいなかったこと、履修者の制限を申し出てきた教官が5名いたことなどです。

最後に委員長より、来年度は一般教育演習以外の科目についても履修調整を行うことになっていること、また来年度は、学生が履修申し込みの参考にできるのはシラバスのみであるので、担当者はその状況を踏まえてシラバスの記載に配慮してほしい旨の依頼がありました。

**高等教育**

## HIGHER EDUCATION

## 北海道大学教育ワークショップ「インタラクティブな授業の開発」 参加者による評価（速報）

高等教育機能開発総合センター教授 小笠原 正明

北海道大学では、1998年度から全国に先駆けてワークショップ形式のファカルティ・デベロップメント（FD）を始めました。本年度のワークショップは、去る11月17日と18日の2日間、朝里川温泉「マリンホテル小樽」で54名の参加者を集めて行われました。このワークショップの特徴は、参加者が討論しながら新しい教育のパラダイムやスタイルを作っていくところにあります。3回目のワークショップを終えた時点で、このような形式のFDが授業の改善に実効性を持つかどうか、今後のあり方も含めて考えなおしてみる必要があります。

FD評価のための一つの方法は、ワークショップで創造された作品（注：「ワークショップ」にはもともと芸術家が集って作品を作るという意味がある）の出来映えを見ることです。今回の場合は、「インタラクティブな授業の開発」という共通テーマが設

定されていたので、この目標に沿って作られたシラバスや授業法の内容やレベルを評価する必要があります。もう一つの方法は、参加者に対して事後アンケートを行い、その結果を分析することです。このワークショップでは毎回参加者のご協力を得て詳細なアンケート調査を行っているため、このような分析は可能です。第一の方法による作品の評価は次号以降にゆずるとして、今回は第二の方法で得られた調査結果の一部をご紹介します。

### ワークショップの概要

プログラムの詳細は前号（32号）に、また使われた資料の一部は「高等教育ジャーナル 高等教育と生涯学習」第7号にマニュアルとして公表されています。当日の参加者は北大から34名、北大以外の大学から11名、世話役はプロデューサーの丹保憲仁総

写真1 全体会議が行われた会場に集合した参加者

長、ディレクターの筆者以下7名、サポート役として教務課から1名が参加しました。北大からの参加者の内訳は、文・教・経済の文系3研究科から各2名、言語文化部から2名、理学研究科から3名、工学研究科から4名、医・歯および薬学研究科から各2名、農学研究科から4名、獣医学研究科から1名、水産学研究科から3名、地球環境科学研究科から2名、医療技術短大から2名、留学生センターから1名でした。他大学からは北見工大と愛媛大学から各3名、山口大と神戸大から各2名、小樽商科大から1名が参加しました。

ワークショップでは、45名の参加者が5つのグループに分かれ、(1)ミニレクチャー、(2)グループごとの討論、(3)全体での討論という一連の作業を5回繰り返しました。このような方法で、「教育の要素」「教育の設計」「学習目標」などの基本的なことから、「インタラクティブな授業の設計」「評価の方法」などの具体的な問題までを検討しました。

どの内容に一番興味を持ったか？

上のような設問によって10の選択肢のうちから選んでもらったところ、上位6項目は以下になりました。

- 1) 小グループ学習の方法 11人
- 2) 教育評価の原則 8人

- 2) 教授・学習方略 8人
- 2) 評価方法とその特性 8人
- 5) 一般目標と行動目標の区別 7人
- 6) カリキュラムの構成 5名

この結果から、参加者はまずこのワークショップの形式そのものに興味を持ち、次いで研修の中心的課題である教育評価や教育目標の問題に注目していることがわかります。

長所は何か？

「今回のワークショップ全体にわたりとても良かったと思われる点は何ですか？」という自由記述のアンケートには、以下に示すように、さまざまなメリットがあげられました。

- 「具体的な授業プランをグループで検討するおもしろさを知りました。」
- 「他分野の人たちとの交流により、ヘテロな意見を聞くことができた。」
- 「多様な価値観に触れることができた。」
- 「詳細な資料を完成されておられる。」
- 「いろいろな独創的アイデアが出て、また具体的な作業としてやれた点」
- 「他学部の先生との交流」
- 「インタラクション」
- 「9人程度の少人数による共同作業形式」

写真2 シラバスコンクールで第一位となり、ホテル特製のアイスクリームをもらう「ドットコム」グループ

「体系的な整理，基本的な理解ができた。」  
 「普段意識的にやっていること（教育）がいかに理論づけ，定量化可能かということがわかって有益だった。」  
 「ただだらしていなかった。緊張感があった。」  
 「よくデザイン準備されていた」  
 「お互い「～さん」で呼ばせていたこと。」  
 「参加者の発表・コメントに対するタスクフォースのアドバイスやコメントは有益だった。」  
 「グループ学習」  
 「北大の将来についてなど大きなテーマについて考えさせられた。」

欠点は何か？

一方，「今回のワークショップ全体にわたり，良くなかったと思われる点（改善すべき点）は何ですか？」という同じく自由記述式の質問にも，多くの回答がありました。その中でもっとも多いのは，「時間が足りない」というものでした。

「ディスカッションの時間が短い。」  
 「休息を含め，考える時間が少ないなどの理由で，結論や考察が乱暴なものになっている。」  
 「時間を限定することは大事であるが，一つ一つの共同作業の時間が短かった。方策として，テーマ数を減らして余裕を持たせる。」  
 「内容が多くて，一つ一つをじっくり考えている時間が少ない。一方2日にわたる研修は，気軽に参加するには不適ではないか。」  
 「日程が詰まりすぎ，ハードなので参加者が限定される。」  
 「作業をこなす時間が短すぎる。」

この問題については，しかし，「時間的余裕が少し無かったような（しかし余り長くてもしかたがないか）」という記述もあり，逆に「時間が長すぎる。」という指摘もありました。「一部のスケジュールが時間的に詰まりすぎていた。（特に初日の前半）参加者がまだ慣れていないときに1分でグループの名前を決めたりする作業は大変，逆に2日目は時間が余ってだらけることがあった。」という記述もあ

ります。1泊2日というワークショップの日程はこれ以上長くする必要は無いが，内容を整理してスケジュールに余裕を持たせた方が良いというのが大方の意見でしょう。

また，ワークショップの方法についても，いくつかの苦情や提案がありました。

「レクチャーが短く雑」  
 「チームをもう一回シャッフルしたほうが知り合いになれる先生が増える。」  
 「結局共同作業がメインで内容（課題 例えば北大の教育像）は二回ではないか。例えば「評価」をどうするかについて，内容的にきちんと議論すること，経験を交流することが必要であると思うが。」

「移動が煩雑」  
 「事例研究を過去1 - 3回の終了時で報告されるとよかった。」

「参加者にあらかじめ活動内容をもう少しアナウンスしておいたら，もっとスムーズにことが運んだのではないか。」

「各研究科のFDの取り組みの発表機会を入れる。」

「授業をよくする具体的アイディアやテクニックをもっと紹介してくれるといいのでは。授業改善に抵抗感のある教官に，理念を説いても実際に改善しようという気は起こりにくいのでは。具体的なアイディアはもっと気楽に使ってみようという気になるはず。」

「コンセプトの解説が抽象的（カタカナが多すぎる）。もう少し例示を入れて具体的に解説して欲しい。また過去の実話に基づく事例研究などを取り上げると興味が一層わくのではないか。」

「TFにフィードバックや「他の暗記型授業」への対応法，運営法などをコメントして欲しかった。」

「教授法に関するTFを回答者，提案者としてQAセッションを設けてみては？」

ここでTFというのは，世話役（タスクフォース）として働いたセンターの研究部の教官のことを指し



ます。この提案の中のいくつかは、さっそく来年度から試してみる価値がありそうです。

一方、次のようなワークショップの「思想的フレームワーク」に関する議論は、そう簡単ではありません。

「システムの価値観が一元的、アメリカ的効率主義の直輸入で、日本の現実に適しているか疑問」「アメリカの例を基に行っているが、ヨーロッパの参考例を聞いてみたいと思う。」

このワークショップが「アメリカ的すぎる」という見解は第1回目から見られるもので、根強いものがあります。しかし、事実を言えば、この研修法は20年以上も前に日本に持ち込まれ、それなりに「日本の現実」に適合しています。また、前掲の「マニュアル」に端的に現れているように、北大における経験の蓄積にもかなりのものがあります。ここで取り

上げたような授業法は、今の学生の立場から言えばとくに違和感はありません。むしろ、20年前に「アメリカ的すぎる」と感じた教官の意識が、いつまでたっても変わらないことの方が問題でしょう。また、このような批判は、それに代るフレームワークの提案を伴っていなければ何を言ったことにもならない、と私などは思っています。しかし、いずれにせよ、フレームワークそのものについての議論をワークショップの一部として取り込むことは十分意味のあることだと思います。

参加者全体としてはどう思っているか？

以上は、個々の指摘を羅列したのですが、参加者全員のアンケート結果をまとめると、ワークショップの成果についてまた別のイメージが浮かんできます。例えば、このワークショップで身につけるべき

問：カリキュラムの構成

問：小グループ学習の方法

問：一般目標と行動目標の区別

問：教育評価の原則

ものとして、設定されている「カリキュラムの構成要素」「一般目標と行動目標の区別」などの習得度を自己評価してもらおうと、上の円グラフに示すようにきわめて良い結果が得られていることがわかりま

問：内容に対する時間量はいかがでしたか

す。

この中で特に「小グループ学習の方法」は、ワークショップそのものが小グループ討論で構成されていることもあって、50パーセント近くが「十分な応

問：このようなワークショップ形式の教育方法としての効果についてどう思いますか？

設問中の「効果なし」は0

問：このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか

設問中の「全く不適切」は0

問：このワークショップで示された教育学的方法を今後取り入れようと思いますか？

設問中の「全く取り入れる気はない」

「余り取り入れようとは思わない」は0

問：上において「少し取り入れてみたい」「かなり取り入れてみたい」「大いに取り入れてみたい」3つのどれかにつけた方は、現時点であなたの教育の現場での実現の見通しは？

設問中の「きわめて難しい」「全面的に可能」は0

問：今後ともこういうワークショップを持つことに対して

設問中の「反対」は0

用力が得られた」と答えており、「理解はできたが応用力は不十分」までも含めると、肯定的な評価が90パーセントを越えています。

ワークショップの全体的評価では、時間量についての評価は自由記述から予想されるように「やや少ない」「少なすぎ」が多数を占めていますが、その教育方法としての効果や参加者自身の興味との適合については、肯定的な回答が圧倒的多数を占めていることがわかります。

このような評価の必然的な結果として、今後ともワークショップを「持っても良い」「持つ方が良い」「是非もつべきである」という意見が参加者の大部分を占めることとなります。

また、ここで習得した方法を今後取り入れようとする人も、「部分的に」という人も含めると多数にのぼり、ワークショップの具体的な効果が期待できません。

今後1年以内に何を改善したいと考えているか？

それでは、ワークショップの参加者は、今後1年以内にどのような授業改善を行いたいと考えているのでしょうか。自由記述の内容を重複を避けて列挙すると以下ようになります。このワークショップで経験したさまざまな方法を試してみようという参加者の多くが思っていることがわかります。カリキュラム、シラバス、評価、授業のありかたを根本的に見直してみようという意欲も感じられます。

「教室をグループ分けして、ディベートによる授業展開をしてみたい。」

「小グループによる学習」

「授業目標の明確化」

「学生主導型の授業を取り入れたい。」

「方略（シラバス等）の全般的な見直し」

「自分の講義にインタラクティブな授業を取り入れてみたい。」

「ポートフォリオの活用」

「研究科に戻って議論の場を作りたい。少なくとも教務委員会では。」

「チーム学習の充実」

「自分の授業の見直し、再構成」

「学部、大学全体への見直しの呼びかけ」

「授業のあり方、カリキュラムのあり方、組織の理念・目標について語り合う場の設定」

「カリキュラムの改訂時の設計作業」

「評価の客観化、定量化」

このような授業改善への意欲は、分野を越えた教育についての議論によって生みだされ、カリキュラムやシラバス作りの作業を通じて具体的なものになったと考えるのが妥当でしょう。

今後の方針

ワークショップ参加者への事前のアンケート調査によると、学内にはこのFDに対するさまざまな誤解があることがわかります。典型的なものは、「洗脳教育をするらしい」「理系の教育原理を文系授業に押しつける」「非現実的な授業法の研修」などです。また、（3回目では大分改善されたようですが）参加の動機を聞かれて「いやいやながら参加した」と広言してはばからない教官が多くいました。3年のあいだ一度もこのFDに協力しない部局もあります。学内には、教育研修などに進んで参加するという姿勢に対する抵抗感が、根強く存在していることがわかります。教育を本務の一つとする公務員がこのような意識を持つに至った原因と過程には興味がありますが、これはまた別の問題でしょう。

しかし事後調査によれば、このような誤解ないし懸念は、ワークショップに参加することによって払拭されていることがわかります。参加者は、分野を横断した教育についての議論を通じて、大学にふさわしい知的共同体の意識を持つようになります。また、教育に関する基本的な原理を身につけることに意欲を持つようになります。今後、プログラムを整理して時間的な余裕を作るなどの改善が必要ですが、基本的には現在のワークショップ形式のFDを本学においてさらに発展させるべきだということが、この事後調査の結論です。

（高等教育開発研究部長）

## 忍路丸海のシルクロードを航く - 私のFD体験談 -

獣医学研究科教授 藤田 正一

「世界一周だと時間がかかりすぎるかもしれない。海のシルクロードを逆にたどってイスタンブールを終着としましょう。」「アンコールワットやインダス文明、メソポタミア文明の遺跡も見学させたい。」「各寄港地で交流するのだから、まず日本のことを十分勉強して、自分たちの文化を紹介できるようにしておかなければならない。」「乗船前に、語学と、各国の文化や宗教と、日本の文化の学習をさせましょう。」「船の中では、寄港地の体験をまとめて発表させ、ポートフォリオを作成させましょう。」「とにかく四六時中一緒にいるのだからそれだけで十分インタラクティブだ。」「航海中は気象観測と表層海水の分析を。」「乗船できない先生とは寄港地でインターネットで連絡を取り合う。」「宗教建築の比較を。」「アイデアを語る人、盛んにそれをノートにメモする人、OHPシートに清書する人、一種異様な興奮の中に、会話と作業がせわしなく同時進行している。ファカルティー・デベロップメント(FD)でインタラクティブな教育法の体験学習のまっただ中である。「北大らしいインタラクティブな授業をひとつ立ち上げ、そのシラバスや評価法を作成しなさい」という課題にグループで取り組んでいるのである。グループは初対面の、各学部から参加した先生がたである。ここでは教授も助教授も学部長もない。お互いは「さん」づけで呼ぶ約束だ。我々のグループは「洋上大学」を授業科目として立ち上げ、海のシルクロードを忍路丸で旅しながら、現地の人と交流し、大学を訪問し、地理と人と文化と自然を学習することとした。文系・理系のヘテロな集団で様々な発想の発言が飛び交う。幸いなことに我々のグループには水産学部の先生がおられた。船の運行に関する情報は彼から得られる。相当に費用がかか

りそうだ。これを実現させるためには予算の裏付けがなくてはできない。この案を発表する時に実現不可能ではないかとの質問が予想される。そこで我々はこれを北大125周年記念事業で行うこととした。そして、本日このFDを取材にきているNHKに「洋上大学」の密着取材を許可する代わりに資金援助を得ることにした。さらに、文部省、外務省からの協賛も取り付け、ふんだんな予算でこの航海を実現するという案に到達した。夢を語りつつ、実現は不可能であろうと思いつつも、実現できたら、どんなに素晴らしい教育になるだろうと、是非とも実現させたいという思いがつのってくる。

発表者がどなただったか、お名前を忘れてしまったが、巧みな話術で、大いに会場をわかせた。他のグループもそれぞれ、ユニークな発想の授業を発表した。学外から参加された愛媛大学の副学長も環境学習を中心とした「北大らしい授業」を熱く語った。ヘテロな集団に限られた時間的制約の中で、真剣に何かをまとめようと取り組むとき、ホモジニアスな集団では思いも寄らぬユニークな発想に到達できるものであるということを教えられた経験であった。グループで一つのものをまとめ上げて行くことの楽しさ、他のグループに負けたくないという競争心、ヘテロな集団故に自分の発言が他のメンバーに新鮮なものとして受け取ってもらえる喜び、これらの巧みな組み合わせが、時間の制約とともに緊張感を生み、発想を絞り出させているのであろう。取り組んでいる最中はもっと時間がほしいと思ったが、ふんだんな時間があると返って発想も遅延しそうである。とにかくにもひとつの形にまとめてから、ゆっくりリファインするという構築もありそうだ。「インタラクティブな授業を作る」ということを検討する

インタラクティブ授業を体験して、アイデアの新しい構築法をも教わった気がする。

参加者全員が大変楽しい経験であったと感想を述

べていた。今回の体験をいつか授業で生かして行きたいと思っている。それにしても、洋上大学の実現の可能性はないものだろうか。(獣医学研究科長)

## FDのききの状況

文学研究科助教授 瀬名波 栄潤

教職免許を持たずに教壇に立つことが大学では許される。FDはこの矛盾を解決するための研修であり、教育機関としての大学の質を向上させるために生まれた。私は在米中にこの種の研修を受けたことがあり、日本の研修内容を楽しみに参加した。

研修地へ向かうバスの中、「上から言われたので、仕方なしに参加しました」という内容の自己紹介が続いた。日本的な挨拶なのかも知れないが、うんざりした。

だが、研修では、みんなの北大への想いがはじけ

始めた。大学教育の直面する問題や解決策などが、仮想授業シラバス作りに反映された。質疑でも現実と理想が率直に熱く語られた。笑顔は絶えなかった。でも、みんないつの間にか真剣だった。FDを通して、効果的な授業運営方法を学ぶだけでなく多くの仲間ができた。そして、北大の未来が明るく見えた。

後日、文学研究科長に報告しお礼を言った。「こんなに嬉々としてFDに参加したのは瀬名波さんくらいだ」と言われた。

## FDに参加して

愛媛大学副学長 西頭 徳三

第3回北海道大学のワークショップには、愛媛大学から3人の教員が参加した。

気温18度の松山空港を飛び立ち、いきなり零下の札幌に入ったとき、身を引き締められた。ところが小樽の研修会場でプログラムが進行するにつれて緊張感が高まり、それが最後まで止むことはなかった。

グループ内の役割分担から議論、取り纏め、そして発表時間を含めて1時間以内に完了すべしとの厳命。いい意見が出ない。時間がどんどん進む。無駄な議論はできない。もう取り纏めの時間だ。ここで9人全員が協力しなくては発表に持ち

込めない。

日頃時間に追われて仕事をしていると思っていた私は、自分の時間の概念が根底から覆ったような気がした。限られた一定の時間内に成果を生み出すという「教育の原点」を垣間見る思いであった。実に新鮮な体験であった。

あるグループの発表係が時間切れで全体討議会場のフロアにあぐらをかいて、OHP用紙を真剣に点検していた姿が今も目に浮ぶ。お世話いただいた高等教育機能開発総合センターの先生、職員の皆様に厚くお礼申し上げたい。

## 音楽があなたを変える - 音楽の心を聴く -

マサチューセッツ大学音楽学科舞踊・音楽講座主任 ジェンキンス教授夫妻によるデモ授業

ジェンキンス教授夫妻によるデモ授業を以下のよう  
に公開します。音楽専攻でない一般学生に、一般  
教育として「音楽」をとりあげるもので、音楽を通  
じての物の見方を考えます。学生参加型授業です。

マサチューセッツ大学は、芸術を一般教育の中心  
にしています。北大で平成13年度から展開する「コ  
ア・カリキュラム」における授業の進め方にも参考  
になると思われます。ご参加くださいますようご  
案内いたします。また、学生にも受講をおすすめ頂  
ければ幸いです。

音楽は、国を越え、民族を越える地球レベルのコ  
ミュニケーション。音楽が運ぶ異文化、芸術に心の  
耳を傾けてみませんか。

ジェンキンス先生は、ホルン等の金管楽器奏者で  
す。マサチューセッツ大学で長年、教養教育改革を  
中心的にすすめてきました。芸術を教養教育の中心  
すえて、多くの活動をしてきました。奥さんもクラ  
リネット奏者で音楽を担当しています。

この授業は、アメリカの大学の教養教育における

「音楽の授業」のデモです。学生参加型、双方性授  
業です。音楽にとくに興味のある学生、ふつうの学  
生など多数の参加を募集します。また、教員、市民  
にも公開します。

日時：平成13年1月12日（金）、16日（火）、  
19日（金）

午後6時15分から90分

場所：北海道大学情報教育館3階スタジオ型多目  
的中講堂

最終日には授業にひき続いてコンパとなります。

担当：ジョン・ジェンキンス

ミリアム・ジェンキンス

受講料：無料

100人ほどの教室で、人数制限がありますので、お  
よその人数を確認するために、希望者は  
kazuabe@med.hokudai.ac.jp（医学研究科教授 阿部和  
厚）にご連絡ください。

## 生涯学習

LIFELONG LEARNING

### 生涯学習フォーラム

#### 「ユニバーシティ・ビジネスパートナーシップ」開催される

本研究部の主催する研究会の一つである「生涯学  
習フォーラム」の本年度2回目として、去る11月7  
日（火）の午後4時から約2時間にわたって、英国  
ノッティンガム大学（University of Nottingham）のモ  
ルガン（John Morgan）教授（比較教育研究センター  
長）をお招きして、情報教育館4Fの共用多目的小  
教室(1)において、学内の他部局からの参加も得て、  
講演と討論の集いを開催しました。

講演のタイトルは、「ユニバーシティ・ビジネ

スパートナーシップ」ということで、大学の生涯学  
習機能との関わりという視点を踏まえて、英国にお  
ける大学と産業界の連携の現状と課題について、そ  
の背景にある思想に関わる考察も交えて、報告して  
いただきました。

約1時間の講演の終了後には、同氏の提供した話  
題に関して、活発な意見交換が同じく約1時間を割  
いて行われました。

なお、今回のフォーラムは、国内の研究グループ

(本研究部元客員助教授がメンバーとして参加)と  
の共同研究のために来日中の同氏の忙しい日程の合  
間を縫って実現したものです。

## 生涯学習計画セミナーを開催します

生涯学習計画研究部では、地域で生涯学習をすすめる皆さんや、まちづくりに住民と共に取り組む自治体職員、社会教育専門職員の方たちを対象に、今日求められる生涯学習のあり方と地域づくりと生涯学習・社会教育の関係、住民の学習を支える社会教育職員や自治体職員の役割について学ぶ公開講座を以下の日程で開催します。受講生の相互交流、講師と受講者のネットワークづくりを目指すとともに、地域の生涯学習と連携する大学の役割についても、ともに考えあう場を目指します。

日時：2001年 2月 1日(木)、2月 8日(木)、  
2月15日(木)、2月22日(木)  
3月 1日(木) 19～21時

会場：北海道大学情報教育館（札幌市北区北  
17条西 8 丁目）

ただし、2月22日(木)は、ちえりあ（札幌市西区宮の沢 1 条 1 丁目 1 - 10）  
申込期間：2001年 1 月 9 日～19日  
申し込み受け付け：北海道大学学務部教務課  
生涯学習担当  
電話：011-706-5253, 5252  
受講料5500円は、郵便為替で上記に送ってください。

主催：北海道大学高等教育機能開発総合センター・  
生涯学習計画研究部  
後援：北海道教育委員会・札幌市教育委員会  
（予定）  
講座の内容についての問合せ先  
北海道大学高等教育機能開発総合センター  
木村 純（電話・ファックス：011-706-5286）

表1. 平成12年度 生涯学習計画セミナー プログラム

日 時	テ ー マ と 講 師	会 場
1回 2月1日(木) 19時～21時	生涯学習行政の現状と課題 - 生涯学習とは何か(1) - 木村 純 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授	北海道大学情報 教育館 4F
2回 2月8日(木) 19時～21時	生涯学習における大学と自治体の連携 町井輝久 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授 ゲスト 宮野敏明氏 兵庫県県民生活部生涯学習振興室長	北海道大学情報 教育館 4F
3回 2月15日(木) 19時～21時	地域住民の自主的活動と行政の役割 - NPOとボランティアの動向にふれて - 姉崎洋一 北海道大学大学院教育学研究科教授	北海道大学情報 教育館 4F
4回 2月22日(木) 19時～21時	生涯学習の時代の社会教育・生涯学習専門職員の役割 内田和浩 北海道教育大学生涯学習教育研究センター助教授 ちえりあの見学をします	ちえりあ (札幌市生涯学習 総合センター)
5回 3月1日(木) 19時～21時	地域づくりの生涯学習その国際的動向 - 生涯学習とは何か(2) - 鈴木敏正 北海道大学大学院教育学研究科教授	北海道大学情報 教育館 4F

# 入学者選抜

## ADMISSION SYSTEMS

### 北海道大学AO入試終わる

本学初めてのAO入試が終わり、11月27日(月)に最終合格者が発表されました。詳細は以下の通りです。

現在研究部では、本年度AO入試実施学部及び出願のあった一部の高等学校(18校)へのヒアリングを

行い、出願書類の内容や入試形態の分析を進めています。また、それらを基に来年度のリクルート計画を立てているところです。

表1 平成13年度北海道大学AO入試合格者について

学部・学科	募集人員	志願者数	倍率	第1次選考			第2次選考			
				選考対象者数	合格者数	不合格者数	受験者数	合格者数	不合格者数	
経済学部	10	60	6.0	60 (37)	30 (19)	30	30	9 (6)	21	
理学部	地球科学科	5	24	4.8	24 (10)	15 (5)	9	15	5 (1)	10
	化学科	8	19	2.4	19 (12)	14 (10)	5	14	9 (7)	5
歯学部	10	24	2.4	24 (7)	15 (6)	9	15	9 (3)	6	
薬学部	15	105	7.0	105 (51)	47 (27)	58	47	15 (9)	32	
水産学部	16	39	2.4	39 (9)	33 (6)	6	33	17 (3)	16	
計	64	271	4.2	271 (126)	154 (73)	117	154	64 (29)	90	

( )内は出身高校等所在地が道内の者



## &lt; 講演と討論の集い &gt;

## 九州大学 21 世紀プログラムとは何か

21世紀プログラムとは、九州大学が平成13年度から導入する新しい教育プログラムで、広範な教養を身につけた専門性の高いゼネラリストの養成を目的とするものです。このプログラムの学生の学籍は既存の4年制学部になりますが、その教育指導などの学生指導は、学部の付託を受けた全学の21世紀プログラム実施委員会が行うものです。

具体的な学生教育は、チュートリアルによる個別指導のもとに、全学共通教育科目、課題提示科目、プログラム・ゼミ、外国語コミュニケーション科目、学部横断的な広範な専攻教育科目の履修など、全学の教育資源を使って行います。

また入学者は、AO入試（アドミッションズ・オフィス方式）による選抜で行います。その内容は、

- ・第1次選抜 講義を聞いた後のレポート（3講義）と提出された調査書及び志望理由書により選抜を行う。
- ・第2次選抜 第1次選抜の合格者に対し、第1次

選抜の講義を題材にした発表と小論文及び個人面接により選抜を行う。

といった、国立大学のAO入試の中でも大変ユニークなものです。

21世紀プログラムの具体的内容や選抜方法について意見交換することは、今後の北大の方向性や新しいAO入試の形態を模索する上で意味のあるものです。興味や関心のある教職員の方々の参加を呼びかけます。

日時：平成13年1月16日（火）午後2～4時

場所：情報教育館4階 多目的小教室(1)

講演：九州大学アドミッションセンター教授

武谷 峻一氏

問い合わせ先：高等教育機能開発総合センター

入学者選抜企画研究部

内線7512（山岸）、または7513（鈴木）

---

## 「高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 」原稿募集

高等教育開発機能総合センターでは、毎年2回「高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 」を発行しています。本誌は、広く高等教育に関する論議を高め、知識・情報を共有するための発表

の場として、これまでに8号まで出版されています。投稿資格は特に問いません。投稿規定は本誌の巻末か、高等教育開発研究部のホームページをご参照ください。原稿の締切は1月末日です。

# センター日誌

CENTER EVENTS, Oct. - Nov.

## 10月

- 5～6日
  - ・第22回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会
- 11日
  - ・第56回センター教官会議
- 19日
  - ・第72回全学教育委員会小委員会
- 25日
  - ・センターニュース第32号発行
- 27日
  - ・第35回全学教育委員会

## 11月

- 1日
  - ・第33回センター運営委員会
- 10日
  - ・第73回全学教育委員会小委員会
- 15日
  - ・入試改革研究会
- 17～18日
  - ・第3回北海道大学教育ワークショップ
- 24日
  - ・第74回全学教育委員会小委員会
- 30日
  - ・第57回センター教官会議

# 行事予定

SCHEDULE, Nov. - Mar.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
12月	25(月)～1月5(金)	冬季休業日	
1月	9(火)～11(木)	補講日	
	12(金)	授業再開	
	20(土)～21(日)	大学入試センター試験【19日(金)休講】	
2月	2(金)	第2学期授業終了	
	5(月)～16(金)	定期試験	
	20(火)正午	定期試験成績提出締切	
	19(月)～21(水)	追試験	
	23(金)正午	追試験成績提出締切	
	25(日)	北海道大学第2次試験(前期日程)【予定】	
3月	12(月)	北海道大学第2次試験(後期日程)【予定】	
	中旬～下旬	学科等分属手続	当該学部
4月	9(月)	入学式	
	11(水)	第1学期授業開始	

### 編集後記

あと数日で21世紀になろうとしています。おじいさんの経験をそのまま引き継げば人生を滞りなく送れる時代は、遙かな過去となりました。今や、教師の経験さえ数年後には古くなってしまいます。

われわれのできる教育が、知識そのものではなく学習の仕方や情報の収集と整理手法に移行するのは時間の問題です。

莫大な情報に押しつぶされないで、スイスイ泳いでいく人物が次世代の理想なのでしょうか。(才)

### センターニュース 第33号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2000年12月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・植木迪子・鈴木誠

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center